

総 説

老人心理学の展望

大 羽 泰

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

(平成 5 年11月17日受理)

A Perspective of Gerontological Psychology

Shigeru OBA

*Department of Clinical Psychology
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted Nov. 17, 1993)*

Key words : gerontological psychology, self concept, self image, elderly person

Abstract

On the grounds that old age is considered the critical phase of life with the various experiences of loss and the last phase with a decline in the function of ego development and personality maturation, I reviewed and evaluated some representative studies of modern gerontological psychology. And I dealt with these significances for technical training in the Department of Clinical psychology of this university. I also stated some classifications and interpretation concerning gerontological psychology.

As a result, the importance of studies of both psychiatry and psychology on self-concept in old age was emphasized, and a new system of gerontological psychology was expected to be constructed.

要 約

老年期を多様な喪失体験を伴う危機的時期であり、肉体と精神の機能が衰退してゆく人生の最終位相であると共に、自我発達の完結期、円熟期であるとみる立場から、現代の老人心理学の代表的研究例を検討し、大学における臨床心理学科の専門教育におけるそれらの意義について論じた。老人の心理に関するいくつかの分類と解釈について述べ、老人の社会的適応を左右する諸要因と適応の様式を論じた。老人の自己概念に関する精神医学と心理学からの研究の重要性が強調され、老人心理学の新体系を形成することが期待された。

はじめに

昭和57年（1982年）10月、岡山県および同社会福祉協議会の主催、岡山県老人福祉施設協議会の実施により、老人ホーム職員研修の一部として「老年心理学」4単位（360分）が開講された。社会福祉事業概論 4，老年医学 2，ソーシャル・ケースワーク 4，老人ホーム処遇論 2，リハビリテーション 4，看護学 2，老人と精神衛生 2，栄養学 2，介護技術と実践 8，その他 計45単位のうち「老年心理学」が4単位を占めていたことは、すでに10数年前、岡山県においても現実的にこの分野の認識が相当に高まっていたことを示している。その前年あたりに、本邦における老年心理学の開拓者であり、『老年学』¹⁾および『老いの研究』²⁾という偉大な業績を残された故橘覚勝先生が来岡され、岡山県社協で講演された由であるが、体系的な講義は上記のものが最初であろう。

以来、今日に至るまで、時代の要請に応じて講義内容や科目名は若干変化したが、「老年心理学」については、主要なものとして継続されている。また昭和58年度からは、老人ホーム新任職員研修にも「老人の心理」が課され、同じ頃から開講されている社会福祉法人旭川荘主催の老人福祉セミナー「老年期（年長障害者も含む）医療と福祉」でも、私は第4回（昭和60年10月）と第5回（同61年10月）に老人心理学を講じるようお招きを受けた。

これらの講義を通して、私は、当時担任であった岡山大学文学部社会心理学講座の演習におけると同様、老年心理ないし老年期の理解のために役立つ心理学的諸研究を体系化することを試みてきた。この度、川崎医療福祉大学の学年進行にともない、臨床心理学科の専門科目として「老人心理学」を開講するにあたり、この方面における研究の動向と、大学におけるこの教育科目のあり方について、以下いくつかの考察と評価を行ないたい。

1. 老年期の見方について

老年期は「様々な喪失体験に遭遇する危機的状況である」という認識とともに、「身体的、精神的機能の衰退を伴う人生の最終位相である」

というのが常識であるが、特に「自我発達の円熟期でもある」という観点が強調されるべきである。Erikson³⁾（1959）の人生周期の考え方では、特にそのような側面が強調されているが、本邦の高齢者問題についても、米国や欧州とは若干時代が遅れて、そのような時期が来ていると思われる。岡山地方でも、身近な所で立派な老人の事例を具体的に知る機会が多いので、このことは大方の同意を得られるであろう。

Erikson⁴⁾（1982）は、ライフサイクルの最終位相としての老年期における発達課題を提案し、そこでは自我の統合ないし完全性（integrity）が達成されるべきであり、それに対応するマイナスの心理的危機として絶望（despair）について述べ、同時に、この時期の徳目としては、英知（wisdom）を挙げた。この「自我の統合ないし完全性対絶望」という図式は、老年期が他の人生周期には経験されないような、人間存在の根源的な不安と葛藤をも内蔵していることを暗示するものであって、老年期に特有な心身機能の衰退と社会的自我の縮小とが、いかに重大な影響を与えるかということを表現するものといえよう。（大羽、1986）⁵⁾

Erikson は、Evans⁶⁾⁷⁾（1967）との対話の中で、再度「老年と円熟期」について触れ、上述の「英知」は、すべての老人にとって、あまりにも厳しい成就目標を意味するように思われるが故に、「英知」という術語（犬田訳では知恵）に満足していないことを述べ、真の英知は、生来の恵まれた人々にだけ発達すると補足的に説明している。

本年の日本心理学会における小講演「老年期と生きがい」（宮川知彰東北大学名誉教授座長）において、筑波大学の井上勝也教授⁸⁾（1993）は、老人の意地とか恨みの動機に言及し、それが生きる意味にかかわっているようにみえる不幸な事例を述べられた。教授はすでにそれを1983年⁹⁾と1984年¹⁰⁾の論文で紹介し、特に後者では、「生きがいのパラドックス」として解説している。それは最近のテキスト¹¹⁾（1990）においても再度とり上げられているが、私は、このような例は、人生のきわめて不幸な社会的異常に伴う偏異した行動であり、Lewin のいわゆる退行（regres-

sion)の一種と解すべきで、老年心理の現実的解釈には適切な事例とは言えないのではないかと提案したが、同席の東邦大学の教授も同様の意見であった。これは老年期の見方、あるいは老人観の問題として今後も論議されるべき課題であろう。

2. 老人の一般的な性格傾向と適応の様式

老人は個性による差が顕著ではあるが、老年心理を研究するに際しては、やはり普遍性の探求が望まれる。老人の一般的な性格傾向として荒井¹²⁾(1990)は、1. 自己中心性 2. 内向性 3. 保守性 4. 疑い深い(猜疑的傾向) 5. 固執性 6. 適応力の低下 7. 不機嫌、愚痴っぽさ 8. 出しゃばり 9. 心気症的 10. 依存的 11. 抑うつ傾向の増大 を挙げている。

従来の文献では、老人の特徴を示すのに適当でないような性格表現が見られたが、上記のものは、内外の諸研究を総合的に検討した結果であり、本邦の老人についてかなり適切な表現になっているので一般に受け入れられると思われる。

老人の社会的適応のタイプとしては、Reichard¹³⁾(1962)の分類が興味深く、教育上でも効果的である。

1. 円熟型(円満な mature 老人)
2. 自適型(ゆり椅子の rocking chair 老人)
3. 装甲(逃避)型(よろい、かぶとで身を固めた armoured 老人)
4. 憤慨型(怒っている angry 老人)
5. 自己嫌悪型(自分はだめだという hated 老人)

これらは感情的表現よりも、むしろ状況動作の言葉でタイプ分けがしてあるので、心理学的には興味深い分類である。最後の自己嫌悪というの、日本語では感情的用語にみえるけれども、英語では hated と動詞の受動態で、行動主義的ニュアンスが現わされており、そのような意味からも心理学的には今なお、モダンな分類といえる。

Reichardによれば、1, 2, 3は全般的に適応は良好とされるが、4と5は適応不良である。これも常識ではあるが、臨床心理学を専攻する学生にとっては、適切な解釈と一般化はいかに

あるべきかということの例示となり、心理学的解釈の意義について考えさせる資料になる。

なお、老人の社会適応については、はやくから下仲¹⁴⁾(1977)による性差と自己概念の研究があり、そこでは自我の強さ(ego-strength)が重要視されている。Havighurst¹⁵⁾(1972)も人格が強く柔軟であり、社会環境が支持的で、体力がある時、適応が容易で successful aging を得ることができるということを指摘し、老年期の課題として体力や健康の低下、退職や収入の減少ならびに配偶者の死などに適応すること、同年齢群への加入参加を確立すること、柔軟な仕方での社会の役割に適応すること、生活条件を確立することを挙げている。(下仲¹⁶⁾(1984)による)

このような観点は、社会学的社会心理学や文化人類学の主要理論である役割理論にもとづくものであるが、臨床心理学を学ぶ学生にとっては、社会学、文化人類学、社会心理学等の広い視野が必要とされることから、特に意義深い提示というべきである。

3. 老人の自己概念をめぐる精神医学と心理学からのアプローチ

自己概念は、自己イメージ、自己意識などとほぼ同義と考えてよい。自己概念は、老人の適応を予測するための重要な手がかりである。

藍沢・加藤・山口¹⁷⁾(1982)は、1975~77の3年間にわたる調査研究にもとづき、老人が抱く自己イメージの変化(肯定的か否定的か)に影響する要因として、年齢、性差、健康、経済、人間関係をあげ、精神医学の立場から、老化と適応の関係を現実的に論じている。かれらは Neugarten の人生満足度指標(Life Satisfaction Index: LSI)を使用し、過去・現在・未来にわたる満足度を測定した。それはいわば各時期の自己イメージの肯定・否定と解せられるものであるが、分析の結果、心身機能の衰退得点と LSI 得点(満足度)とは加齢過程で平行しないこと、満足度は75歳までの老年前期を通じて上昇するが、75歳を境に低下が始まること、主観的健康感だけは全く低下しないこと、が見出された。

下仲・村瀬(1975)¹⁸⁾(1976)¹⁹⁾は、老人用 LSI を考案して、老年期の自己概念を分析した結果、

老年期前期と後期とでは、加齢による自己概念の変化が生じることを明示した。このような結果を考慮に入れて藍沢らは、75歳前後を境にして老人心理は微妙に変化することに注意を喚起しており、老性自覚の発現時期の著しい個人差から、年齢はあまり関係がないと考えるべきではなく、やはり基本的要因の一つであることを忘れてはならないと述べている。これは医学的立場からは当然の解釈であり、心理学者が慎重に考えるべき側面である。

精神医学からの研究として、上記の藍沢らの研究の他に竹中²⁰⁾(1982)による「老年期の人格障害」が注目されるが、臨床心理学を学ぶものにとって意義深い事実に知見と解釈を提供している。これらは、臨床心理学の教育研究において、現実感覚を学ぶために価値ある文献資料である。

老人の自己概念を中心にその人格特性を解明しようとした心理学的研究として、すでに少し言及した下仲・村瀬の研究は、いわば心理学的老年心理学の代表的研究例である。それらの原著論文は「SCTによる老人の自己概念の研究」(1975)および「加齢と性差よりみた老人の自己概念」(1976)として公刊された。当時の岡山大学文学部における心理学演習では、これらの論文によって心理学と社会心理学の両講座にふさわしい教育研究の内容を加えることができ、レポート評価から学生に対する教育効果もきわめ

て高いということがわかった。下仲²¹⁾(1988)はさらに資料と理論的考察を加え、学位請求論文『老人と人格』を公刊しているが、これは老年期の心理学的研究——老年心理学——の典型として、また1990年代における大学および大学院の臨床心理学の教材としても価値ある道しるべとなるであろう。

おわりに

「老年期をさまざまな喪失体験に遭遇する危機的状况であり、身体的機能と精神的機能の衰退を伴う人生の最終位相であると共に、自我発達の完結期、円熟期でもあると見る立場から、現代の高齢者心理の課題を展望し、体系づける。」

これは平成3年に開学した川崎医療福祉大学の臨床心理学科第3年次配当教育科目「老人心理学」(2単位)のシラバスの冒頭にかかげた案内文である。本論説も、この同じ立場で老年期および老人心理の課題を考察しようと試みたものである。ここに触れなかった講義予定の内容としては、「老年期と時間的展望の心理」「施設入所と老人の心理」「老人の社会的動機」「老人の不安特性に関する研究」「老年期の人格障害」「老年期の性差と自我の強さ」等があるが、これらはいわば各論として成立することを期待している。近い将来、事実に知見と諸家の理論を広く総合して、老人心理学の新体系が形成されることを望むものである。

文 献

- 1) 橘 覚勝(1971) 老年学. 誠信書房, 東京.
- 2) 橘 覚勝(1975) 老いの研究. 誠信書房, 東京.
- 3) Erikson EH (1959) *Identity and the life cycle*. International Univ. Press. (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性. 誠信書房, 東京.)
- 4) Erikson EH (1982) *The life cycle completed*. W. W. Norton.
- 5) 大羽 蓁(1986) 中都市在住老人の肯定的自己意識の分析. 岡山大学文学部紀要, 7, 53—62.
- 6) Evans RI (1967) *Dialogue with Erik Erikson*. Harper and Row. (岡堂哲雄・中國正身訳 1981 エリクソンは語る——アイデンティティの心理学. 新曜社, 東京.)
- 7) Evans RI (1976) *The making of Psychology: Discussion with creative contributors*. Alfred A. Knopf. (犬田 充訳 1982 現代心理学入門(下). 講談社, 東京, pp 261—298.)
- 8) 井上勝也(1993) 老年期と生きがい. 日本心理学会第57回大会発表論文集, S. 68.
- 9) 井上勝也編(1983) 老年期の臨床心理学. 川島書店, 東京.

- 10) 井上勝也 (1984) 老年心理学の課題. 心理学評論, **27** (3), 307—315.
- 11) 井上勝也 (1990) 老年期と生きがい. 宮川知彰・荒井保男編 (1990) 老人の心理と教育. 放送大学教育振興会, 東京, pp 136—146.
- 12) 荒井保男 (1990) 老人の人格. 宮川知彰・荒井保男編 老人の心理と教育. 放送大学教育振興会, 東京, pp 100—114.
- 13) Reichard S (1962) *Aging and personality*. Wiley.
- 14) 下仲順子 (1977) 自我の強さよりみた老人の性差および自己概念. 老年心理学研究, **3**, No. 2, pp 83—96.
- 15) Havighurst RJ (1972) *Developmental tasks and education*. David Mckay.
- 16) 下仲順子 (1984) 加齢と人格. 心理学評論, **27** (3), 260—271.
- 17) 藍沢鎮雄, 加藤政利, 山口弘一 (1982) 老年期の心理. 臨床精神医学, **11**, pp 555—561.
- 18) 下仲順子, 村瀬孝雄 (1975) SCT による老人の自己概念の研究. 教育心理学研究, **23**, 36—45.
- 19) 下仲順子, 村瀬孝雄 (1976) 加齢と性差よりみた老人の自己概念. 教育心理学研究, **24**, 156—166.
- 20) 竹中星郎 (1982) 老年期の人格障害. 臨床精神医学, **11**, 563—569.
- 21) 下仲順子 (1988) 老人と人格 自己概念の生涯発達プロセス. 川島書店, 東京.